平成２７年度岡崎幸田小児救急医療対策部会　会議結果

日　時：平成 27 年７月３日（金）
　　午後１時 30 分～３時
会　場：岡崎げんき館　２階会議室
出席者：花田直樹、鈴木研史、金野浩二、辻健史、椙山広美、
　　半田一郎、吉田孝正、三宅梨香、大崎麻里、増田優民子、
　　片岡博喜、杉浦嘉一郎（敬称略）
事務局：西尾保健所、岡崎市保健総務課、幸田町健康課

議事録
１　あいさつ　西尾保健所長
２　部会長選出　岡崎市保健所長を互選により選出
３　議題

議題（１）岡崎幸田地域における救急医療の現状について	
岡崎市（加藤）	【資料説明】 資料１ Ａ表～Ｄ表について（岡崎市医師会夜間急病診療所） Ｅ表について（岡崎市医師会休日当番医療機関） Ｆ表について（岡崎歯科医師会休日夜間診療所） ア～オについて（岡崎市民病院救急外来） 　岡崎市民病院は救急医療の最後の砦 　軽症患者は市内の医療機関、夜間急病診療所の利用を促したい 資料 4-1～4-4 について（岡崎市民病院救急外来） 　非紹介患者のうち、受診後そのまま帰宅した患者が啓発ターゲット 　市民病院では平成 26 年１月から小児患者への非紹介加算の適用を開始（2,000 円×消費税）。一定の効果が出ていると感じている。 資料 5-1～5-2 について（岡崎消防・幸田消防の救急搬送） 資料 6 について（愛知県夜間小児救急電話相談）
花田医師	H26 から開始された小児への非紹介加算の効果が出ていると感じる。 非紹介加算の適用は、本当に受診しないといけない患者が、お金が無い等の理由で受診できないという状況が懸念されるが、入院件数は減少していないのでその影響は出ていないと感じる。 出前講座の成果もあると思うが、最近の出前講座の実施状況はどうか。
岡崎市（加藤）	出前講座は、保健所職員が主に保育園・幼稚園に赴き実施している。 働く母親が増えていることもあり、件数自体は減少傾向にある。平成 26 年度は 22 回実施した。
鈴木医師	小児救急の受診動向を見ると、市の啓発活動も功を奏していると思う。 ただし、救急の啓発が受診抑制になってはいけないと思うので、引き続

	き、この辺りの配慮もお願いしたい。小児の救急車利用が減少傾向にあるようだが、これも啓発の効果が出ているのだと思う。ただし、最近の保護者の中には「これくらいのことで救急車を呼んでもよいのか」と逆に遠慮してしまう方もいると聞いている。
金野医師	小児救急の取り組みを継続してきたおかげで、岡崎幸田の小児科では紹介状を書いて岡崎市民病院の救急外来に送るという流れができている。このことは今後も継続していきたい。
辻医師	市民病院の救急外来では、現状、受診抑制が大きく働いて重症患者が受診できなかったという話はあまり聞かない。少しずつではあるが、救急外来における非紹介の帰宅後受診患者は減ってきているので、この点は市民病院に期待されているニーズに近づいている印象を持っている。 ただし、救急の待ち時間が長いという苦情は今も多い。待ち時間を短くするためには、小児に限らず、全体の救急外来の受診を減らす必要がある。
椙山氏	いろいろな機会をとらえて、夜間急病診療所に小児科があることを啓発する必要がある。 夜間急病診療所でも待ち時間は長くなることがある。患者の中には「受診を取りやめて市民病院へ行きます」と言われる方もいる。市民病院へ行っても待ち時間が長くなることは説明している。
半田氏	乳幼児の救急車利用は、その大半が「けいれん」と「発熱」である。 けいれんと発熱を同時に発症しているケースもあれば、けいれんのみ、発熱のみの場合もある。インフルエンザの流行時期は特に発熱のみの救急車要請が多い。
部会長	消防として、小児患者の不適切な救急車利用を感じているか？
半田氏	けいれんや発熱の場合、保護者が救急車利用をすべきかどうかを判断するのはなかなか難しい。思わぬ病が隠れている場合もあるので、救急車を呼んだ方がよいケースが多くある。市もガイドブックで啓発してくれているので、現状では、岡崎市内で小児患者における救急車の不適切な利用が横行しているとは感じていない。
吉田氏	幸田町の場合、救急要請の多い地区は新興住宅地である。 ＃8000、ガイドブックも新興住宅地の方が知らない、読んでいないといったケースをよく見聞きする。 消防でも講習会を開催し啓発しているが、新興住宅地の方は講習会を受講する機会が少ないように思う。
部会長	こどもの急病ガイドブックはどのように配布しているか？
幸田町	出生時に役場で、1歳6か月児健診時に保健センターで配布している。 転入者には医療機関一覧と＃8000 が記載されたチラシを手続き時に配布している。

岡崎市	幸田町と同様である。ただし、岡崎市では小さな子どものいる転入者世帯にも配布するようにしている。
三宅氏	こどもの急病ガイドブックはあまり読まなかった。ただし、熱が出たときには手にとって対処方法を調べた。
大崎氏	救急車を呼ぼうかどうか迷った時に、ガイドブックを見たことがある。ケガをしたときには、＃8000 を思い出し、電話してアドバイスを受けてから受診した経験がある。
増田氏	市民病院の救急にかかった時に４時間待ったことがある。
部会長	ガイドブック等の活用はどうか。ある程度理解してもらえているのか？
三宅氏 大崎氏 増田氏	常に読むというよりは、何かあったら見る、という感じです。 同様の意見あり。 同様の意見あり。
鈴木医師	市のこども急病ガイドブックを保健所からもらい、私の医院で行っている母親教室や４か月児健診の時に使い方を説明しつつ配布している。
花田医師	ガイドブックの存在を忘れている、読んだことがない、そういった声がまだまだ多いように感じる。 どのように使うのか、どんな時に役立つのかを保護者に直接伝えるような機会を増やすことが必要。
部会長	皆さんの話から、今後取り組むべき方向性として、ガイドブックの配布に加えて、ガイドブックや小児救急の仕組みをいろいろな立場の方がいろいろな場面で繰り返し説明していくことが必要と感じました。例えば、説明に使用するために岡崎幸田地域で共通のチラシなどを作って、それを岡崎市や幸田町、医師会、市民病院、消防などいろいろなところで使っていくというのも、一つのアイデアだと思います。また、小児救急の話をする際には、医師会夜間急病診療所に小児科専門の医師が毎日いることも合わせて周知すればよいと思います。これらの取り組みを今後行っていただくということで、この議題を終えたいと思います。
議題（２）小児救急医療に関する意見交換	
岡崎市（中田）	【啓発活動について、現状を説明】
部会長	保育園や幼稚園において、出前講座を積極的に活用してもらいたいと考えますが、どのような状況、日程であれば受けてもらえるのか。
三宅氏	保育園・幼稚園のイベントがあれば、そのときに講座を開くことは可能だと思います。また、子どもが遊べる環境があれば、保護者は集中して話を聞くこともできると思います。
岡崎市（加藤）	園行事は年間計画が前年度末には決まってしまうと聞いている。それらの行事の１幕を出前講座に充てていただけないものかと思っている。
鈴木医師	保育園には園医がいる。園医の業務や動きとタイアップすることも考えてほしい。

大崎氏	保育参観などの行事の時に、同時に行うのがよいと思います。 ただし、土日の場合は難しいと思う。
増田氏	ＰＴＡの企画で消防の救急医療講座を受講したことがある。保健所から消防に依頼して、小児救急の話も加えてもらったらよいと思います。
部会長	各園の役員が集まる機会はあるか。 そのような機会に一斉に出前講座の活用についてアピールできないか。
保護者	役員会は年に何回があると思います。
部会長	消防でも救急に関する講座等をしていただいているのか。
半田氏	岡崎市では、子ども会や子育てサークル等が消防署の見学に来所されたとき、あるいは、消防から保育園・幼稚園に出向くこともある。その際には、子どもの急病ガイドブックの配布や説明を行っている。 ガイドブックは、救急車の利用に関しても掲載されているので、消防としても活用している。
吉田氏	子どもの救急に関しての講座の依頼は多い。依頼者の希望によって内容も変えている。講習の際には「＃8000」の啓発を行うようにしている。

４　その他

椙山氏	市で新しいチラシを作成・配布していく予定か？ 医師会も新たな手段による啓発の必要性を感じている。 もしも、小児保護者向けの新しいチラシができるのであれば、医師会の健診センターに置いてみたい。検診センターには、保護者だけでなく、祖父母世代も多く来所するため、チラシがあれば啓発に使用したい。効果はあると思う。
金野医師	ガイドブックの記載について、Ｐ２、夜間急病診療所４行目の「開業」→「小児科医」に変更してはどうか。
花田医師	夜間急病診療所には「小児科専門医がいる」ということもアピールしてはどうか。
辻医師	小児救急の知識は緊急時にニーズが高く、平常時は低くなる。 いざという時に素早く役立つことに重きを置いて考えてはどうか。 ここにアクセスすれば、岡崎市の情報がすべてわかる IT システムなど。
部会長	現行では、＃8000 がまさにそれに当たる。今すぐできることは、平時から緊急時の対応方法を繰り返し伝授しておくことだと思います。今後も、岡崎市と幸田町にはガイドブックを発行していただき、出生時と１歳半健診で全員に配布してもらうこと。さらに、その間を埋めるためにチラシ等を活用して、行政だけでなく、医師会や医療機関、消防等にも啓発してもらう、こういった体制を目指していただければと思います。